井野瀬久美惠著

『子どもたちの大英帝国
——世紀末、フーリガン登場』

川分圭子

一

本書は、九〇年出版された『大英帝国はミュージック・ホールから』に続く井野瀬氏の二作目の著書である。同書は前作の後編として意図されたものではないが、あとがきで著者自らが述べているように、一作目で扱ったミュージック・ホールの客層の中で相当な割合を占めていた「子どもたち」への関心が本書の出発点となっている。前作の中で井野瀬氏は、ミュージック・ホールがその歌や踊りを通して観客に大英帝国をアピールするメディアであったことを明らかにしている。このような場でイメージとしての大英帝国を受容した「子どもたち」は、しかしその一方で現実の帝国とも無縁ではあり得なかった。時はまさに世紀末、帝国は今黄昏の時を迎えつつあり、大人達の関心は必然的に帝国の将来、そしてそれを担っていく存在としての子ども達に向けられていたのである。つまり、本書の意図は、帝国と無縁ではあり得なくなった時代に生きた「子どもたち」が帝国とどう対峙していたかを描くことにおかれている。

以上の著者の問題関心から、本書で扱われる「子どもたち」は、ミュージック・ホールに出入りできるような年齢に達した若者達、階層としては労働者階級の子弟であり、時代は一八九〇年代から二〇世紀初頭、すなわちボーア戦争によって初めて帝国の存続に不安が兆し始めた時期が中心となっている。著者は、一八九八年の盛夏のバンク・ホリデーにロンドンの街頭で発生した不良少年達による暴行事件を発端として、叙述を開始する。こうした若者達による集団暴行事件は以前から多発しており、現象自体としては特殊性はなかった。しかしこの事件を境として、こうした不良少年達は、共通の名称、すなわちフーリガンという名を与えられることとなった。このことばの起源は明確でないが、これが外国起源、特にアイルランド語と認識されていたことは確実で、当時のイギリス人達がこの日常的不良行為を外来現象として理解したいという願望を持っていたことがここに露呈する。また、フーリガンという言語の普及にあずかったのがミュージック・ホールの歌であり、この結果ミュージック・ホールとフーリガン現象は因果関係としてとらえられた。実際当時の大人達は、若者の暴力化を彼らが頻繁に通っていたミュージック・ホールの悪影響として愁えたのである。

それでは実際にどのような子どもたちがミュージック・ホールへ通い、またそこからどの様な情報を受容していたのであろうか。井野瀬氏はミュージック・ホールの事故犠牲者の一覧を史料に、だいたい一四から一七歳の労働者階級の子弟達が多かったこと、それがフーリガンと呼ばれるようになる若者達と一致した年齢層であったことを明らかにする。世紀後半の大英帝国の繁栄は、労

働者階級の子どもたちに、義務教育を終え正式な職につくまでの「若者期」という時間と、新しく出現した労働形態、ドア・ボーイ、メッセンジャー・ボーイ、駅やホテルの荷物運び等の「少年労働」を通しての収入を与えたのである。こうして余暇と小遣いを得た若者達は、フットボールの試合に出かけ、自転車を買い、果ては仲間同志で服装を揃えるなどフーリガン・スタイルをも形成し、独特の文化を築き上げるようになっていた。そして、彼らが頻繁に通ったミュージック・ホールでは、折しもジンゴ・ソングなる戦闘的愛国主義の歌が喧伝され、大衆の帝国意識の高揚におおいに寄与したのである。

しかし、このミュージック・ホールの観客だった労働者階級は、単に受動的にジンゴイズムに身を任せたわけではない。対外政策では広く大衆に支持された植民地相ジョセフ・チェンバレンに対しても、その保護貿易政策に関しては、彼らの反応は否定的であった。またボーア戦争が実際に開始されると、ひたすら愛国心を鼓舞するのみの歌は人気を失い、代わりに戦争を舞台とした家族や恋人の愛や別れをテーマとする歌がぞくぞくと登場したのである。このようなミュージック・ホールやその観客であるフーリガンの中にある「抵抗の要素」は、労働者階級文化の伝統の継承であると井野瀬氏は位置づける。ボーア戦争勃発という帝国の現実を突きつけられた時代の若者達は、この抵抗の伝統をフーリガニズムという形で表現したのである。

では、このフーリガン現象は当時の中産階級の有識者にどの様に解釈されたであろうか。氏は当時の新聞、評論、委員会報告などから、「国民の退化」問題という観点を抽出する。ことの起こりは一八九九年に行われたボーア戦争志願兵検査で、実に六割の若者が身体的欠陥のため不適格となったことにあった。以前から出生率低下が招いたイギリス人の量的減少が問題とされていただけに、この質的低下問題のクローズアップは帝国存亡への不安をかき立てた。有識者達は、この若者達の身体的堕落の原因を一様に都市化の悪弊として理解した。即ち、彼らは、アスレティズムを重視するパブリック・スクール教育を是とする観点から、兵卒となるべき労働者階級の子弟達が都市化の中で発育不良のヒステリックな潜在的暴徒、イコールフーリガンとなってしまっていると警鐘を鳴らし始めたのである。

イギリス民族の保存への取り組みは、まず出産と子育ての改善、わけても労働者階級の母親に的を絞る活動として現れた。母親が育児、家事に正しい知識を持つこと、さらには帝国への愛着を自ら持ち、子へと伝えることによって、肉体的にも精神的にも子どもたちの退化が食い止められるとしたのである。

また、一八七〇年の初頭教育の義務化以来労働者階級においてもかなり就学率が向上してきていた世紀転換期においては、この初頭教育の現場で大英帝国の未来を担うべき「帝国民族」の自覚と誇りを覚醒しようとする動きがみられるようになる。それは、従来の読み書き算盤中心の教育を改め、変わって仲間意識や自己犠牲の尊さ、イギリス人としての誇りを教えることであり、具体的には歴史の必修化として登場した。これに加えて、身体的向上を目的とする体育の必修化も重要である。歴史教育においては、イギリス人であるが故の義務と権利の由来の歴史的理解と、世界で唯一秀でたイギリス国民の偉大さを学ぶという観点が重視され、

授業内容は偉人の偉業を中心としていた。また当時使われた教科書には、ロバート・シーリーの『イギリス海外膨張史』の歴史理解が強く反映されていたのであり、これによりイギリス人は自国の歴史を島国から帝国への成長の歴史として限りない誇りと愛国心を持って理解するようになった。このような帝国意識の盛り込みは、ともすれば他の民族や人種への偏見や差別表現となって教科書に登場している。また、自治植民地など帝国領内の子どもたちとイギリス本国の子どもたちの間の文通も民間団体などによって奨励されたが、これは帝国の子どもたちがイギリスを本国として意識し、本国の子どもたちが帝国を身近な存在として理解するよう推進することを狙いとしていた。しかし、労働者階級の子どもたちはこのような中産階級の価値観の押し付けの教育に対しただ順応したのではない。学校教育とて、フーリガニズムへの流れをせき止めるものではなかったのである。

国民の退化現象への対策として、民間のボーイズ・クラブ運動が次に注目される。最初こうした運動は中産階級の子弟のみを対象にしていたが、次第に労働者階級の子どもたちのフーリガン化を食い止めるべく彼らをも取り込む努力がなされるようになった。従来の運動がキリスト教福音主義に根ざし聖書講読を活動の中核として少年達に礼儀や道徳を教えるものだったのに対し、世紀末のそれが軍隊的な規律と組織に基づく身体的鍛錬中心へと移行していくのも、より労働者の子弟達にアピールする活動形態の案出としてのことであった。またこの変化は次第に軍国主義化する時代の要請でもあった。わけても、ボーア戦争のスーパーヒーロー、ベイデン－パウエルによって設立されたボーイ・スカウト運動は、活動の精神的支柱をキリスト教にではなく、大英帝国への愛国心に求めたのである。また彼は、富める者も貧しき者も第一にイギリス人としてイギリスを世界の頂点にとめおく義務を担うとして、この活動を階級を超えたものとして想定した。彼はイギリスの少年達の多くがフーリガニズムにおかされた存在であると認識していたから、これらを無視しては「国民の退化」現象を食い止めることなど不可能だと理解していたのである。また、彼はフーリガンの中にある仲間意識を正しく導くことにより、彼らに戦友意識をもたせ帝国の勇敢な兵士に育成することも決して不可能ではないと考えていた。このようにボーイ・スカウト運動は、帝国防衛の分脈においてフーリガンを捕らえなおしていたのである。

しかしこのボーイ・スカウト運動とて、中産階級的価値観を脱皮しきってはいなかった。膝小僧まるだしの服装、異性との分離等は、少年に大人世界との分離、即ち早熟を排しあくまでも少年らしさを求めるパブリック・スクール的精神の現れであり、労働者階級の子どもたちには所詮馴染めないものであった。結局この運動の主力もまた、中産階級の子どもたちであった。

一方、少女達に対しても、同様な形で帝国維持の枠組みの中での役割分担がされた。彼女達に期待された役割とは、母性、即ち帝国を支える子どもたちを生み育てる「帝国の母」としてのそれに他ならない。学校教育における家庭科の充実と必修化は、労働者階級の少女達への母性教育を学校に求めたものであった。また民間の数多くの少女クラブは、働く労働者階級の少女達を対象にし、少女労働の状況改善や売春問題の解決に主眼をおいて活動していた。つまり将来帝国の母となるべき彼女達の清浄化を目的と

していたのである。このような活動の中で最も進歩的であったベイデン＝パウエルの妻オレイヴ率いるガール・ガイズ運動は、明確な市民意識を持つ自信ある女性を目指したという点で他の少女クラブとは一線を画すものではあったけれども、家庭における女性の役割を強調していた点では同域を脱し得ていない。結局ボーイズ・クラブ活動におけると同様の中産階級的な価値観の押し付けが、ここでも見受けられるのである。この中産階級的女性像は、やはり労働者階級の少女達の受け入れるところではなかった。小金を握って自立した彼女達の自由に振舞う姿がミュージック・ホール等で盛んに見受けられ始めたのも、このころであった。

二

以上、できるだけ著者の論旨にしたがって本書の内容を紹介した。本来一八世紀イギリス史を専門とする評者は、一九世紀末に関してはまったく門外漢であるが、以下感じた点を二、三、述べさせて頂くこととする。

まず、井野瀬氏の「帝国の文化史」研究が前作にとどまらず本書によって更に広範囲に発展したことを喜びたい。従来のイギリスの帝国史研究では、帝国支配構造の解明という目的のもとに、本国と植民地の政治・経済関係が中心課題となっていた。また従属理論の影響下に、加害国イギリスと被害者植民地という色分けの視点から脱することができなかった。このような結果、帝国の形成と発展が社会の下部構造に与えた効果の調査はなおざりにされてきたのである。イギリスでは近年このような研究のあり方に対する反省が生まれており、メディア、大衆文化、教育や宗教、絵画など当時の文化の研究を通して帝国が社会構造や人々のメンタリティに与えた影響を探ろうとしている。ジョン・M・マッケンジーが編集長を務めるマンチェスター出版局の帝国主義研究のシリーズは、この新しい社会文化的アプローチの成果として現在も刊行が続けられている。

井野瀬氏の功績は、何よりこのような最新の研究動向を日本の学界に導入したことに求められる。この結果、日本のイギリス帝国史研究においても、「帝国意識」の問題を本格的に取り上げようとする機運が生まれつつある。また氏は単に海外の研究書の利用にとどまらず、その非凡な史料収集能力を生かして、精力的に一次文献を集め読みこなしており、その意味で氏の仕事は本国でも高く評価されるべきものである。

ただ、本書において子ども文化という新しい題材に取り組んだことは評価できるけれども、前作と同様、大英帝国とこの題材との関連がいま一つ明らかにされていないことは残念である。ここでは、そうした点を少し詳しく指摘しておきたい。

最初に気になるのは、著者が労働者階級と中産階級の対比という形で描こうとしている点である。氏は四章の「フーリガン現象のイギリス流解釈」のところで、中産階級の有識者達がフーリガン現象を外国起源の、イギリス本来のものではないものとして異質視したこと、そしてこれを「国民の退化」現象の元凶と捉えたことを述べ、この後五、六、七章で中産階級が学校、ボーイズ・クラブ、少女クラブを通してフーリガンあるいはフーリガン予備軍の労働者階級の子どもたちを帝国防衛の支柱にすべく囲い込んでいったと解釈する。そしてそれらにも関わらず、労働者階級の

子ども達は完全に囲い込まれることなく、労働者の伝来の抵抗の文化をフーリガニズムに表現していったという。しかし、イギリス人の帝国意識を考えるとき、果して中産階級、労働者階級といった区別は有効なのだろうか。

評者には、帝国に対する素朴な誇り、愛国心、そしてこうした感情が有事にしばしば陥るジンゴイズムといったものは、階級を超えて共有されたものであるような気がしてならない。もちろん帝国意識の現れ方は階級によって異なるであろう。確かに、将来の帝国を担う若い世代の肉体的、精神的鍛錬を学校教育や民間のクラブ活動を通して行おう等という思考法は、紛れもなく知的エリートのものである。そして、彼らの思考法に則って教科書やボーイズ・クラブの活動内容に帝国意識が盛り込まれ、それが子どもたちに擦り込まれていったことも事実であろう。しかしこうした行動の根底にある将来に渡る帝国存続への願望は、当時の全てのイギリス人によって抱かれていたのではないだろうか。即ち労働者階級の子どもたちとて、こうした帝国への愛、誇りはすでに十分もっていたと考えられるのであり、本書の帝国へ囲い込もうとする中産階級とそれに抵抗する労働者階級という図式はにわかには信じ難いのである。そして評者の考えるようにこのような感情がイギリス人全てに共有されていたのであるならば、中産階級と労働者階級の対比として描くことは、かえって焦点の帝国という問題関心をぼかしてしまう効果を及ぼしたと言えないだろうか。

またこれと関連するが、著者は、「気晴らし文化から生まれたジンゴイズムは新しい抵抗文化フーリガニズムへと、新しい展開を見せることになる。」（五九頁）、「フーリガニズムは、ジンゴイズムが育んだ「イギリス人であることの快感」への挑戦でもあった。」（八七頁）、「彼らの周辺に、体制順応のジンゴイズムから体制反抗のフーリガニズムへ向かう風が吹き抜けた。」（一六四頁）等として、ただ単に帝国に追随するジンゴイズムと、労働者伝来の抵抗文化の継承たるところのフーリガニズムを対比しているようである。しかしフーリガニズムが抵抗の文化であったとしても、それは果して「帝国への」囲い込みへの抵抗であっただろうか。確かに、労働者達は植民地相ジョセフ・チェンバレンにアンビバレントな態度を示してはいた。しかし彼らのコーラス、「ロシアにコンスタンチノープルを渡してなるものか！」、「チェンバレン先生、貧民の食べ物に税金をかけないで！」（共に五〇頁）を当り前に解釈するならば、彼らは帝国に基本的に愛着を持っていたが彼らに不利に働く経済政策にはそのときどきで反抗したということになり、決して彼らが帝国に対しアンビバレントであったということにはならないであろう。彼らは単に穀物価格の上昇に反抗したのであって、それが「帝国」関税同盟運動のせいだから反抗したわけではない。

また、五章で説明される学校教育へ一般的な子どもたちが示した反抗も、決して帝国主義教育への反抗ではなく、体罰を持って丸暗記を強制する学校、自分の食いぶちぐらいは稼がねばならない子どもたちに出席を強制する学校への抵抗であったと理解するのが自然である。帝国教育そのものに反抗した生徒がごく例外的存在であったことは、氏自ら述べるところでもある。

ボーイ・スカウトや少女クラブの活動に労働者階級の子どもたちがなじまなかったのも、それがまず子どもに子どもらしさや純

潔を求め、また中産階級的な男女の役割分担、即ち少年には外での、少女には家庭での役割を押し付けるものだったからに他ならない。つまり少年達は帝国防衛を意識した軍隊式教育に抵抗したのではなく、ただ単に少年労働を中心とした労働者階級のライフスタイルを無視したやり方についていけなかったのであり、また少女達も「帝国の母」としての役割を拒否したのではなく、現に収入の必要な彼女達に母としての役割ばかり説いている団体に飽きたらなかったのである。

従って、フーリガニズムは中産階級的価値観への労働者階級の抵抗文化とは言えても、中産階級による「帝国への」囲い込みへの抵抗文化とは位置づけられない。故に、フーリガン、フーリガニズムという言葉を帝国意識の問題と絡めて使うことには、非常に無理があるのではなかろうか。本書ではこれらを鍵の概念として使うことによって、かえって本来の課題の帝国から論旨がそれてしまったと、評者には思われるのである。

本書で著者の主張したかったことは、こうしたことよりもむしろ、「ボーア戦争前後の時代、労働者階級の若者達が、帝国を身近に感じたこと」（五一頁、中略あり）ではなかろうか。評者は、氏が史料収集にかける熱意こそ、氏の主張の代弁であるように感じるのである。すなわち、氏は豊富な史料の紹介を通して、帝国意識が社会の情報伝達の末端である労働者階級の子どもたちにまで行き渡っていた現実を描きたかったのではないのか。しかも、その点でこそ本書は成功していると思われるのである。

（新書判　一一＋二五四頁　一九九二年一月　中央公論社　六八〇円）

（京都大学研修員　　）